柳宗悦：人と仕事

〜“用の美”発見の場〜

社会人間科学コース修士1年

黒沢侑子

1. はじめに

柳宗悦(やなぎ むねよし)は、日本を代表する思想家である。1889年に現在の東京都港区で生まれる。1910年、学習院高等科卒業の頃に文芸雑誌『白樺』の創刊に参加。宗教哲学や西洋近代美術などに深い関心を持っていた柳は、1913年に東京帝国大学哲学科を卒業する。その後、朝鮮陶磁器の美しさに魅了され、朝鮮の人々に敬愛の心を寄せる一方、無名の職人が作る民衆の日常品の美に眼を開かれた。そして、日本各地の手仕事を調査・収集する中で、1925年に民衆的工芸品の美を称揚するために｢民藝｣の新語を作り、民藝運動を本格的に始動させていく。1936年、日本民藝館が開設されると初代館長に就任。以後1961年に72年の生涯を閉じるまで、ここを拠点に、数々の展覧会や各地への工芸調査や収集の旅、旺盛な執筆活動などを展開していった。１）

今回は、日本民藝館を中心に、『人と仕事』をテーマに調査を行った。

1. 方法と対象

方法：フィールドワークと文献調査

対象地：日本民藝館

　対象地概要

日本民藝館は、「民藝」という新しい美の概念の普及と「美の生活化」を目指す民藝運動の本拠として、1926年に思想家の柳宗悦(1889-1961)らにより企画され、実業家で社会事業家の大原孫三郎をはじめとする多くの賛同者の援助を得て、1936年に開設された。「民藝品の蒐集や保管」「民藝に関する調査研究」「民藝思想の普及」｢展覧会｣を主たる仕事として活動している。柳の審美眼により集められた、陶磁器・染織品・木漆工品・絵画・金工品・石工品・編組品など、日本をはじめ諸外国の新古工芸品約17000点が収蔵されており、その特色ある蒐集品は国内外で高い評価を受けている。１）

1. フィールドワークの成果

成果として、次の3つが挙げられる。

1. 民藝館の陳列された展示物を見ている来訪者から、「良い物には目が行かないね。普段使いのものがいいね」という声が聞かれた。他に、「（家にあった民芸品を）とっときゃ良かったんだよね」という客に対し、同伴者が「でもその時は捨てちゃうんだよね、“こんな物（いらない）”って」という会話が聞こえた。
2. 民藝館の脚注はどれも手書きだった。古民家のような風合いをもつ建物とともに、職人の手による展示物を中心に、人の手を連想させる見せ方を多用していた。
3. 民藝館の展示物に関する注意書きは、一般的な美術館に比べとても少なかった。これについて民藝館内に、「作品に集中し堪能するべきだという柳の思想を尊重したもの」というような説明があった。
4. 概念化

今回の調査で得られた結果から、日本民藝館を次の3つテーマに概念化した。

1. 現代消費社会における『民藝』の思想を伝える場
2. 統一感のある空間づくり
3. コンセプトに沿った美術館

以下に、それぞれのテーマについてサブカテゴリーを示して説明する。

1. 現代消費社会における『民藝』の思想を伝える場

サブカテゴリーは以下の二つである。

* 「用の美」「使い込んだ美」の発見

柳は、道具を持ち続ける・用いることでその美的価値(自然・温もり・味)、使用価値 (使い込むこと)が増すことの意義を説いた。２）日本民藝館はその理解を深め、再発見する場としての役割を担っていると言える。

* それらの発見の難しさ

３-①で記した会話のように、民藝館の展示物と同様の民芸品が、家庭で簡単に廃棄されてしまうことは珍しくなく、「用の美」の価値を見いだすことは難しいということを示しているといえる。

1. 統一感のある空間づくり

サブカテゴリーは以下の二つである。

* 空間全体に人の手の跡を残す

柳をはじめ濱田や河井らは、それまで美の対象として顧みられることのなかった民藝品の中に、｢健康な美｣や｢平常の美｣といった大切な美の相が豊かに宿ることを発見し、そこに最も正当な工芸の発達を見た。１）　民藝館はその“美”を見せる空間として、３-②で示したように、“人の手”を全体的に感じるよう工夫をしていた。

* 館全体が作品

その結果、館全体に統一感が生まれ、館自体が一つの作品のようになっていた。

民藝館の杉山学芸部長は、「民藝館の使命は美の標準の提示にあります。民藝館では一貫した美の目標の下に、個々の品物をまた全体を整理しています。単なる陳列場ではなく、従って並べ方も事情の許す限り物の美しさを活かすように意を注いでいます。品物は置き方や、並べる棚や、背景の色合いや、光線の撮り方によって少なからぬ影響を受けます。陳列はそれ自身、一つの技芸であり創作であって、出来得るなら民藝館全体が一つの作物となるように育てたいと考えています。」と話す。３）

1. コンセプトに沿った美術館

サブカテゴリーは以下の二つとした。

* 展示物に集中する工夫

説明書きのほとんどない展示物の陳列法は、確かに作品それ自体に集中させ、堪能できるという良さを実感した。美術館は、実際の展示物を見る場であり、それにまつわる詳しい情報は書籍やインターネットでも得られる。

* 美術館の一般的な見方に関する疑問提示

一方で、作品についてより深く考える機会が減ることは否めない。

これについて日本民藝館職員の月森俊文氏は、「普通の美術館だと、まず挨拶文があって、趣旨の説明があって、作品に細かい解説がついていて、順路通りに進んでいくと展覧会のコンセプトがわかるようになっています。しかし、民藝館では（中略）順路はなく、説明書きも最低限です。これが民藝館開館以来の方針です。」 「説明書きがあると、お客様はそちらばかり読んで、あまりものを見て下さらない。文章を見て、チラッとものを見て次に行く。そして次の品ものも解説を読んで…という繰り返しです。ものにまつわる事柄や意図、その作家の人生を言葉にして押し付けてしまって、作品自体の美しさや価値が置き去りにされてしまっている傾向があると思います。」「世の中の全てに共通するかもしれませんが、肩書きとか作品にまつわる事柄でそのものの価値判断をしているように見えてしまう。そういった価値判断に疑問を呈したのが、当館の創設者であり、思想家でもあった柳宗悦です。柳は「直観」で見ることがとても大切だ、と言っていますが、肩書きもストーリーも、あらゆるものを取り去ってものだけを直に観て、そのもの自体に備わっている「美」や価値を見出そうとしたんです。ですから民藝館では、なるべく来館者の方が余計な先入観を持たずに作品を見て下さるように説明は最小限にしています。」と答えていた。４）

1. 引用文献
2. 日本民藝館HP

<http://www.mingeikan.or.jp>

1. 陳景揚(東京大学大学院総合文化研究科)

「民藝」における環境論理

柳宗悦の思想と消費実践を中心に

1. 東京人権啓発企業連絡会　https://www.jinken-net.com/gozonji/information/1105.html
2. 直観」で見る「美」――『柳宗悦と民藝運動の作家たち』展

日本民藝館職員、月森俊文氏インタビュー

https://synodos.jp/culture/19080

1. 周辺情報・資料
* 日本民藝館創設80周年記念

民藝の日本-柳宗悦と『手仕事の日本』を旅する-

高島屋で、柳宗悦が日本各地で蒐集した日本民藝館の所蔵品を中心に、各地の民藝館の所蔵品を加え、約170点の優品を紹介する展覧会。各会場を巡回する。

横浜高島屋（2017/9/13～9/24）
大阪高島屋（2017/9/27～10/9）
京都高島屋（2017/12/14～12/25）

名古屋タカシマヤ（2018/2/23～3/5）